

豊南小学校・校長室だより

平成 29 年(2017 年)4 月 28 日
発行者 西山 博章

児童数配布

第 6 号
(通算 92 号)

参観、懇談、ご参加いただき有難うございました！！

お忙しい中、今年初めての授業参観、学級懇談会に足を運んでいただき有難うございました。昨日の校長室だよりで書きましたが、新年度がはじまって 1 ヶ月たった中、子どもたちがそれぞれの学年、クラスで国語の授業や社会、道徳の授業に取り組んでいる姿は皆さんの目にはどう映ったのでしょうか？

毎年、いろいろな学年の子どもたち(中学校での経験も含めてですが)を見てきましたが、4月の滑り出しがその1年間を決定すると言っても決して過言ではないと思います。

新年度のスタートは誰もが、新しい学年、新しいクラス、新しい先生、新しい友だち…に大きな期待と不安を抱えています。「不安」があるのはどの子どもでも同じです。しかし、そこから逃げてしまおうというようなマイナス思考はありません。不安はあるものの、新しい学年やクラス、先生、友だち等々に対して、この不安に勝る大きな期待をいただいているからこそ、これからの1年間を精一杯頑張る最後までやり遂げようという純粋な気持ちのあらわれの結果だと思えます。この思いが、4月の学級、学年、学校の滑り出しの状況に反映されているのだと考えています。今年、本校のどの学年、クラスも当初の学級開きの日から見て感じていたのですが、ごく自然に新しいクラスとしてまとめ、学級活動はもとより授業でもとても滑らかに進み始めたようです。このように感じているのは私だけではなく、他の先生方や、学校アドバイザーの永澤先生からも同じ感想を聞いています。

これからの1年間、しっかりと見守っていきたいと思います。保護者の方々も、参観だけでなく、家庭訪問や、個人懇談、オープンスクールなど、ほぼ毎月、学校にきていただく機会を設けていますので、是非、私たちと一緒に子どもたちを応援していただければ幸いです。

☆☆☆☆ 「AAE(Animal assisted education) 動物介在教育について…

動物介在教育については、以前より機会を捉えて校長室だよりでお話しをしてきました。一言で表わすことは難しいのですが、簡単に言うと、動物との交流(直接的はふれ合いだけでなく、精神的なふれ合いも含みます)を教育活動の中に取り入れることで、子どもたちに対する様々な教育効果を高める取り組みだと言えます。

「心の教育、命の教育」の必要性があちこちで強く求められていることはご存知だと思います。教育現場では、本校の先生方もそうですが、国語や算数等の教科授業のみならず、運動会や学習発表会への取り組み等に関しても、様々なきめ細かい指導法の工夫をして毎時間の授業に臨んでいます。たとえば、1年生の最初の学習で「ひらがな」を教えるときですら、かつて私が小学生だったころでは考えられなかったような斬新な(?)方法で、子どもの内面から理解と定着を図ろうとしています。(実際にどんな方法かは参観でご覧になったかもしれません)

また、登校や生活面に課題のある子どもに対しても、先生たちはお家の方ときめ細かく情報を共有して丁寧に、丁寧に時間をかけて対応しています。

しかし、それでもなお、それぞれの課題を克服することが難しいケースがあることも事実です。外部機関によるカウンセリング等の方法もありますが、それでもなお解決することが難しいケースもあります。

そういった昨今の状況から 1980 年代以降、欧米を中心に人と動物の関係が人に与える影響に関して重要性が認識されるようになり、とりわけ動物との触れ合いが人の心身の健康に与える科学的検証が行われてきました。その医療や福祉の現場での取り組みである動物介在療法や動物介在活動にやや遅れて、「動物介在教育(AAE)」という表現が用いられるようになってきたのです。そしてこの AAE は大型犬を使った実践が多く行われています。

「動物介在教育(AAE)」は、まさに教科書や黒板では決して教えることのできない「こころ」をしっかりと伝えることができるという意味で、立派な教育として成立するといえます。

「命を大切に」と言っても、命の何たるかを、言葉や理屈で呑み込むには経験的な材料が少なすぎる子どもたち。しかし、そこに 1 頭の血の通った温かい犬がいるだけで、子どもたちだからこそ、その柔軟さによって感性で受け入れ、本能的ともいえる「弱いものを守る」という優しさが発動するのではないかと思います。ましてや、犬の寿命は人のそれよりはるかに短い。自分たちがすっかり大人になる前に年老いていく姿、そして消えていく命にふれることは何ものにも勝る命の教育といえるのではないのでしょうか。

今年の校長室だよりの第 1 号で書きましたが、今年度、本校でも大型犬を使った動物介在教育を試みていきます。次号では、これについて具体的に、世界保健機構も協賛している「人と動物の関係学」を提唱している世界的な組織である「IAHAIO」が示している実施にあたってのガイドラインについて説明したいと思います。

To be continued (次号に続きます)

